



ヴァーサス  
芸劇リサイタル・シリーズ「VS」 Vol.7

## 河村尚子 × アレクサンドル・メルニコフ

Geigeki Recital series “VS” Vol.7 Kawamura Hisako × Alexander Melnikov



©Marco Borggreve



©Molina Visuals

## 室内楽の対話と オーケストラの広がり、 時代の夢を織りなすピアノの響き

ドイツを拠点とする2人のピアニスト、河村尚子とアレクサンドル・メルニコフが11月、シューベルト、ドビュッシー、ラフマニノフの名作で、驚きの初共演に臨む。

ピアノ1台でみる夢は、それだけで大きい。それを2人で、そして2台でみつめると、巨大な響きと真剣な対話のステージに広がっていく。

ドイツを拠点とする名手ふたり、河村尚子とアレクサンドル・メルニコフが今秋、初めてのデュオ・リサイタルに臨む。2人の個性が向き合う「VS」の第7弾にして、海外の演奏家が登場するのはメルニコフが初めてとなる。

「メルニコフとは10年以上知り合いで、いっしょに飲みに行ったりもしますが、共演するのは初めて」と河村は言う。「ロシアの出身らしく、スケールが大きくて、でも内はとても繊細で。つねに真剣に、作曲家が意図したことを求めている人だと思います。どんなときも、その音楽の核を理解して、それを表現しようとしている」

近年河村も集中して取り組んでいるシューベルトから晩年の連弾作品「幻想曲」D940で始め、交響詩『海』をドビュッシー自身による4手版で採り上げ、ラフマニノフが渡米して最後に作曲した「交響的舞曲」の2台ピアノ版で堂々と締め

くくるプログラム。オーストリア、フランス、ロシアからアメリカへと旅するなかで、時代は19世紀から20世紀半ばへと進んでいく。

「シューベルトは私の提案です。『幻想曲』はシンフォニックで、ソナタ形式の感じもある。それと、私が新しい作品にチャレンジしたいこともあり、彼がドビュッシーとラフマニノフを提案してくれました。オーケストラの曲を弾くのは大好きですから、うれしいなと思って。天から降ってきて、海に行き、地で終える、全体としてはそんなプログラムになるでしょうか(笑)」

河村が連弾や2台ピアノに惹かれてきたのも、室内楽の楽しみに満ちているからだろう。相手がメルニコフならば、なおのこと刺激的だ。

「同じピアノという楽器で、どんな音色で、どんなイントネーション、どんなタッチで弾くか。私はこう思うけど、同じフレーズを彼は違うふうに弾いてくれるのかな……そういう楽しみがありますね。それと、同じ楽器で分厚い和音をつかっていったり、音で絵画と一緒に描いていっ

たり。ドビュッシーではとくに、色彩を操っていく、と言ったらいいのかな。いろいろな鍵盤楽器に触れてきたメルニコフだからこそ、音への気づきがいさぐいと思うので、とても楽しみです」

河村にとって日本で初めてのピアノ・デュオ・リサイタルともなる今回、彼女は好んで低声部を受けもち、ラフマニノフでも第2ピアノのパートを弾くという。

「小さい頃から、母や姉、友人とも、よく連弾していました。こどもだったときは、低音域を誰かが弾いてくれる。それで、ベースの音がドーンときて、響きが魔法のように広がるのがすごく好きでしたね。いまだったら私がベースに行くと、娘が上を弾いたりしています。こどもの教本とか弾いていると、私はすごく好きなんですけど、娘は『ママ、じゃま。弾けない』って(笑)」

では、先々の「VS」に母娘での登場を期待してもいいだろうか？

「いや、それは無理」と、河村尚子は朗らかに笑った。

取材・文：青澤隆明（音楽評論）



11月14日⑧ 19:00開演  
コンサートホール 詳細はP09へ

出演：河村尚子、アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)  
曲目：シューベルト／幻想曲 へ短調 D940  
ドビュッシー／交響詩『海』  
(作曲家編による1台4手版)  
ラフマニノフ／交響的舞曲



東京芸術劇場マエストロシリーズ

## 井上道義 & 読売日本交響楽団

Inoue Michiyoshi & Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

## 蘇る指揮者、 井上道義による「復活」

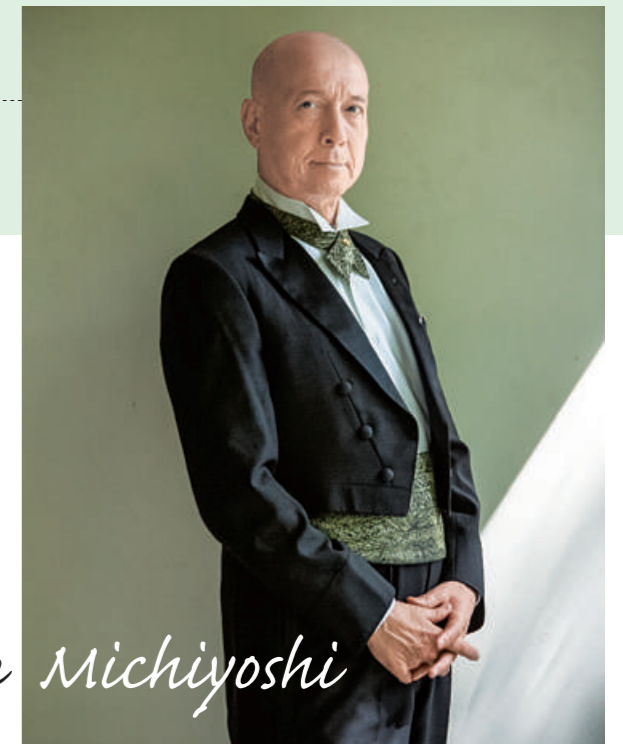
2023年のマエストロシリーズはマーラーの「復活」。さまざまな経験を乗り越え、「引退」を目前にした指揮者がオーケストラと共に「復活」を遂げる。

マーラー「交響曲第2番『復活』」の第5楽章。開始後ほどなくして、最後の審判を告げるラッパの音(ホルンで奏される)が、舞台ウラから聞こえてくる。ある意味で、ここからがこの曲の本当の始まりだ。そしてひとしきりオーケストラが音画をつづったあと、ついに合唱が導入される。「蘇る、そう、お前は蘇るだろう……」。震えるような一瞬。

11月の「マエストロシリーズ」では、井上道義がこの交響曲を振る。

演奏家の人生と音楽作品を安易に重ねることは慎まねばならないけれども、しかし一方で、それらが無関係であるはずもない。2024年末で「引退」を決意しているという彼は、この死と再生の音楽にどのように向きあうのだろうか。これまでに井上は、マーラー「第8番」「第3番」「大地の歌」をこのシリーズで読売日本交響楽団と演奏しているが、今回の「復活」はおそらく、そのどれとも異なる特別な演奏になるはずだ。

井上道義といえば、なによりショスタコーヴィチのスペシャリストというイメージが強いが、彼の指揮者としての評価を不動のものにしたのは、新日本フィルとのマーラーの交響曲全曲演奏会にほかならない。シカゴ響での伝説的な客演もマーラーだったし、つい先ごろには、若き井上がロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団とセッション録音を行なったマーラー「4～6番」のディスクが復刻されて話題を呼んだ。つまり、ここで、という勝負どころではマーラーを振ってきた、生粋のマーラー指揮者でもあるのだ。



©Yuriko Takagi

Inoue Michiyoshi



Takahashi Eri



Ikeda Kaori

もっとも、勝手に想像するならば、マーラーの中でも「第2番」は、彼にとって少々厄介な作品という気がする。というのも、この曲はまだ青春の延長線上にあったマーラーが書いた、なかなかセンチメンタルな音楽でもあるからだ。ここではしばしば、作曲家の夢が論理を越えて音楽を圧する。こうした運びに、おそらく井上道義はほのかな違和感を覚えているにちがいない。しかし、だからこそ、面白い。

おそらく井上道義は、マーラーの書いた青春の響きを、自分なりのやり方で再構築しようとするはずだ。そもそも、まだ30代半ばのマーラーにとって、「死」ははるかに遠い存在であり、ゆえにここで「生きるために死ぬ」と歌う合唱

は、あくまでも甘美な陶酔のなかにある。既にさまざまな経験を乗り越え、さらには「引退」を間近にした井上にとって、この一節は全くちがった意味を持って響いているはずだ。

かくして、この演奏会は、彼のキャリアのなかでも特別なものになるだろう。76歳の井上道義がタクトをとる「復活」。目撃しないわけにはいかないではないか。

文：沼野雄司（音楽学）

11月18日⑤ 14:00開演 コンサートホール 詳細はP09へ

出演 指揮：井上道義  
ソプラノ：高橋絵理  
アルト：池田香織  
合唱：新国立劇場合唱団  
管弦楽：読売日本交響楽団

曲目 マーラー／交響曲第2番 八短調「復活」

